

2007年9月25日

中国の貿易黒字拡大の背景と日韓の対中貿易構造の比較

1. 世界経済の推進役を期待される一方で貿易黒字の拡大が続き一人勝ち状態の中国

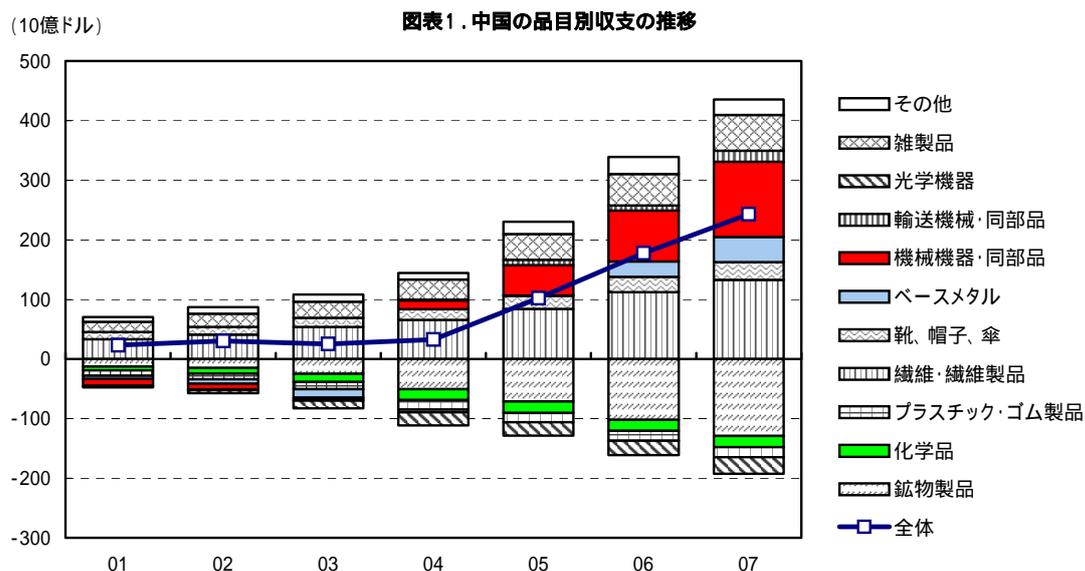
米国のサブプライム・ローン問題に端を発する金融市場の混乱から欧米先進国景気の先行きに不透明感が強まる中、高成長を続ける中国経済に世界経済の推進役としての期待が高まっている。しかし、現実には中国の貿易黒字は拡大する一方で、いわば一人勝ちの状況にある。したがって近隣アジア諸国をはじめとする諸外国にとって対中輸出を梃子にした成長、対中貿易黒字の拡大といったシナリオの実現はそう簡単ではなさそうである。

本稿では中国の貿易黒字拡大の背景を品目別並びに国・地域別収支の観点から整理すると同時に日本と韓国という台湾に次ぐ二大対中貿易黒字計上国（中国にとっては貿易赤字計上国）の動向を比較検討することによって対中輸出拡大戦略の今後について若干の展望を試みた。

2. 品目別貿易収支の動向：黒字に転じた機械類の収支

中国の貿易黒字は2004年の約330億ドルから2005年に1,000億ドル超に急拡大。その後も拡大が続き今年（2007年）は2,430億ドル（1-8月期実績の年率換算値）近くに達すると見られている。

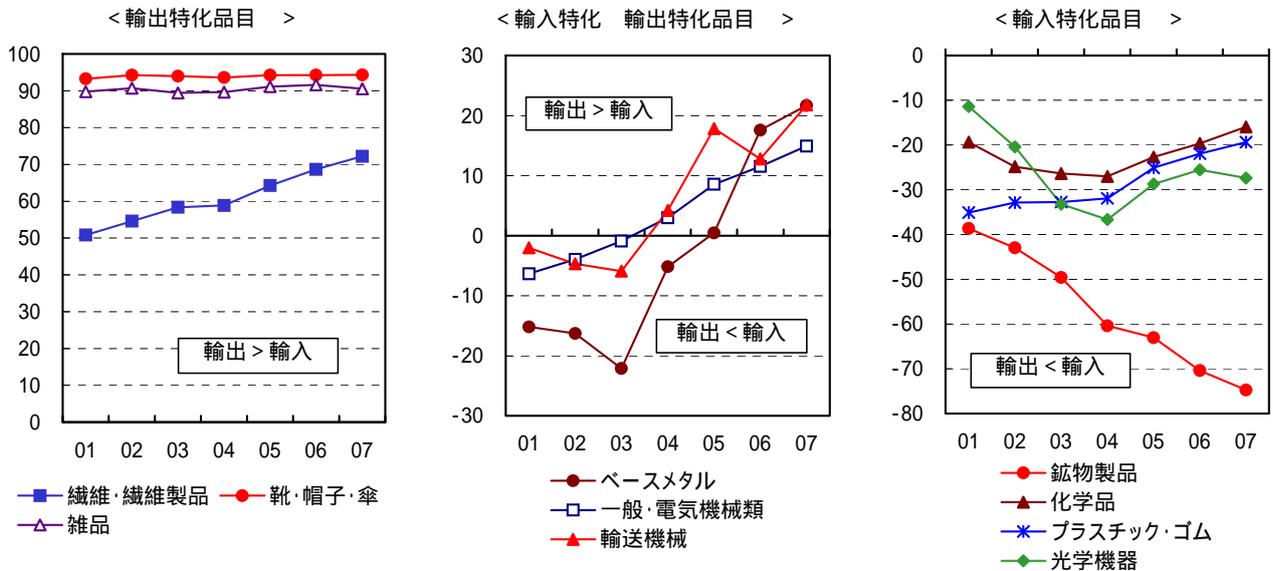
こうした貿易黒字の推移を品目別の貿易収支の観点から見たのが図表1である。これを見ると繊維・繊維製品、家具や玩具などの雑製品といった従来から中国の輸出競争力が強い品目で黒字が積み上がる一方、2004年以降、一般機械や電気機械とそれらの部品を含む機械機器・同部品の項目の貿易収支が黒字に転じ、その後黒字幅を拡大させつつ、中国の貿易黒字額の増加に大きく寄与していることがわかる。また、2005年以降には鉄鋼製品をはじめとするベースメタル類も黒字項目に転じている。



(出所)CEIC (注)2007年は1-8月期実績の年率換算値。

こうした状況を同一品目の輸出入のバランスから見る貿易特化係数（＝（輸出－輸入）／（輸出＋輸入）＊100）で見ると、一般機械並びに電気機械類が部品等の供給体制も整い生産が本格化する中で輸出競争力を高めて、輸入特化から輸出特化状態に転じている様子がよくわかる（図表2の）。一方、原油を中心とする鉱物製品については中国の原油需要の拡大と原油価格の上昇が相まって輸入特化傾向が強まっている状況を確認できる。

図表2. 中国の品目別貿易特化係数の推移

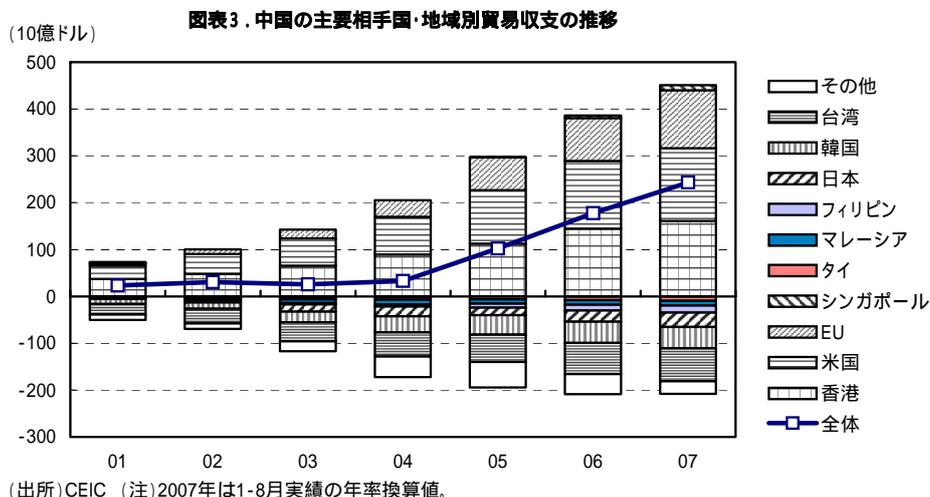


(注1) 貿易特化係数 = (輸出 - 輸入) / (輸出 + 輸入) × 100; +100に近いほど輸出に特化(輸出競争力大)、-100に近いほど輸入に特化(輸出競争力小)、0近傍は輸出入額が均衡している状態。水平分業が進んでいるケースなどがこれに相当。
 (注2) 2007年は1-8月実績値ベース。

(出所)CEIC

3. 国別収支の動向：対欧米・香港で黒字拡大の一方、アジア近隣諸国には赤字計上続く

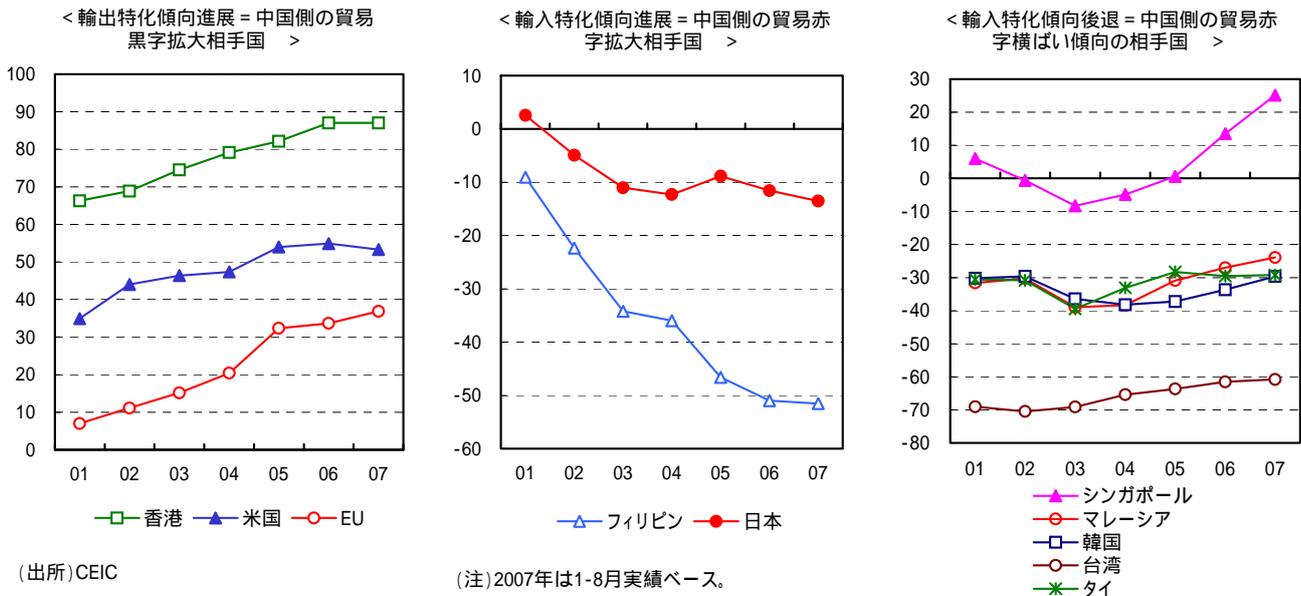
次に主要相手国・地域別の貿易収支の動向を見たのが図表3である。シンガポールが2005年以降、貿易黒字相手国に転じた以外、対欧米・香港の黒字が拡大する一方で、台湾、韓国、日本などアジア近隣諸国に対しては赤字を計上するという構図が基本的に続いていることがわかる。



(出所)CEIC (注)2007年は1-8月実績の年率換算値。

ただし、国・地域別の貿易特化係数を見てみると、中国が貿易赤字を計上する国の中でも日本、フィリピンについては輸入特化の度合いが強まっている、すなわちこれら2カ国が対中輸出競争力を強化していることが示唆されるのに対して、台湾、韓国、マレーシアなどについては輸入特化の度合いが後退傾向にあることが観察される（図表4のと）。こうした差異が生じる背景に何があるのか、以下、日本と韓国の対中品目別貿易動向を比較してみた。

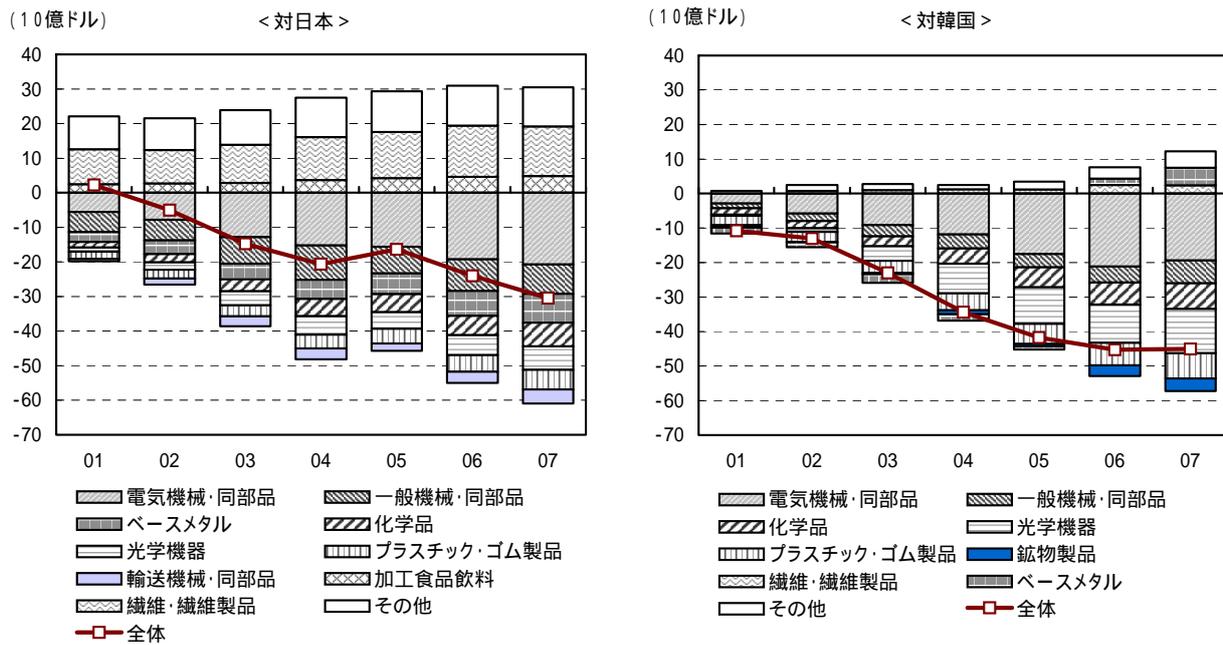
図表4. 中国の主要貿易相手国別の貿易特化係数の推移



4. 機を見るに敏な韓国 vs. 棲み分けを進める日本

図表5は中国の対日・対韓の品目別貿易収支の推移を図示したものである。

図表5. 中国の対日・対韓品目別貿易収支の推移



中国の貿易赤字額（図表5の折れ線）すなわち日本と韓国の対中貿易黒字額は韓国の方が大きい（07年1-8月実績の年率換算値で韓国450億ドル vs. 日本300億ドル）。しかし、これは韓国の対中赤字品目（額）すなわち図表上ではプラス表示されている中国の対韓黒字品目（額）が少ないことが主因である。実際、対中貿易黒字品目（中国の対日・対韓赤字品目）の合計額だけを見れば、日本が韓国を上回っている。しかし、日本は繊維製品などを中心に大幅な対中赤字（中国の対日黒字）を計上しており、これが対中黒字を一部相殺するため、貿易収支の黒字額（中国の対日貿易赤字額）は韓国を下回る結果となっていることがわかる。

また、日本と韓国の対中黒字品目の中身を見ると

- a) 電気機械・同部品や一般機械・同部品などの機械類が対中黒字の大半を占めている、
 - b) また化学品やプラスチック・ゴム製品は両国とも黒字品目となっている、
- といった共通点が見られる。

しかし、その一方で、

- c) 日本ではこれらに加えて、ベースメタル、輸送機械も対中貿易黒字の拡大に寄与しているのに対して、韓国ではベースメタルは2006年以降、対中赤字品目に転じているほか、輸送機械の対中黒字額は小幅なものにとどまっている。
 - d) また、日本では鉱物製品は対中赤字品目となっているが、韓国では足元、主要対中黒字品目となっている、
- といった相違点が見られる。
- e) 他方、液晶パネルなどを中心とする光学機器については両国とも対中貿易黒字を計上しているがその規模は韓国が日本の約2倍の水準となっていることが注目される。

以上の諸点を2頁の図表2（中国の品目別貿易特化係数の推移）を参照しながら検討すると、韓国は鉱物製品、光学機器など中国が輸入特化傾向を強めている品目（図表2の ）、すなわち中国の供給力が弱い品目でまさにその需要に応える形で対中貿易黒字を拡大していることがわかる（上記d、e）。これは機に敏な韓国企業の行動を反映したものと見えそうである。

これに対して日本は一般・電気機械はもとより輸送機械、ベースメタルなど中国が生産力を高めて輸入特化から輸出特化に転じている品目（図表2の ）で対中黒字を積み上げている（上記c）。こうしたことが可能なのは日本企業が中国の台頭を見据えつつ自らの強みを活かすべく棲み分けを進めているからではないかと考えられる。

ところで、3頁の図表4（中国の主要相手国別の貿易特化係数の推移）は中国のキャッチアップのスピードが速いこともあり、韓国型の戦略で対中輸出を拡大し続けること、すなわち対中輸出競争力を維持していくことが次第に難しくなっていることを示唆していると言えそう。もちろん同じ理由で日本型の棲み分け戦略もいつまでも安泰とは言えないだろう。言い古されてはいるが中国の台頭は日本にとっても韓国にとっても、そしてそれ以外の国にとっても、やはり好機であると同時に危機でもあるようだ。

調査部 野田麻里子(mariko.noda@murc.jp)

本レポートに掲載された意見・予測等は資料作成時点の判断であり、今後予告なしに変更されることがあります。